

僕は、3年間一生懸命やってきたものがあります。部活の剣道と、クラブチームのサッカー、そして勉強です。すべての物事に一生懸命に打ち込むことは本当に大変です。また、恥ずかしさや周りからの視線、そして聞きたくない

「なにかっこつけてるの。」

「バカみたいに本気だな。」

などのような言葉を気にして、一生懸命物事に取り組む人が少なくなっているように思います。これから、もっと一生懸命取り組む人が多くなるためにはどうしたらいいかを考えていきます。

まず重要なことは、一生懸命取り組むとはどのようなことを考えます。人によって様々な受け取り方がありますが、僕はこう思います。

「その物事に対して本気で向き合っているから、自然と起こること。」

僕の考え方では、「一生懸命やろう」と決めたものは、きっとどこかで「これくらいやったからもういいや。」と忘れてしまいます。しかし、「本気で向き合う」ことで、上手になりたい、強くなりたい、成長したいと自然に思えるようになってきます。自然に思えたときに初めて「一生懸命取り組む」といえるのです。

次に考えることは取り組む姿勢に対する周りからの目です。もちろん取り組む姿勢を見て「あの子あんなに頑張ってる。」「僕も負けない。」と感ずることができる人が大半だと思います。しかし、ごくわずかだけれど「なに、かっこつけてるの。」「バカみたいに本気だな。」と受け取ってしまう人がいるかもしれません。このような人から感染していったら、みんなに広まったら、正しいことをしているのに、まるで悪役のようにされてしまいます。こんな悲しいことは起きてほしくありません。これらを防ぐためには、僕たちの努力だけでは足りません。皆さんの温かく、優しい目と心で支えてください。

次は、その子がどこまで頑張れるのかを周りが知っていることです。「一生懸命取り組む」ということは、良くも悪くも結果が出るということです。良かったときは「やった、ここまできた。もう少し、まだ少し。」と上昇気流に乗ることができます。しかし、悪かったときは、「え、あんなに努力したのに。」と落ち込んでしまいます。その後「もっとやらなきゃ。」と気持ちを新たに努力することができる人もいますが、逆に「努力しても意味なかった。もうやめよう。」と忘れてしまうかもしれません。そうなったら、その子は一生懸命取り組めなくなってしまう。この状況を変えるには、その子の頑張りを見て、どこまで頑張れるか知っているみなさんの一言が必要です。「あなたはよく頑張った。」この一言でその子は絶対に変わることができます。変わることができたら、「前よりももっとやろう。」と、どんどん前に進みます。

さて、ここまで三つの考えを書きました。これらを元に、これからの人生の過ごし方についても考えていきたいと思います。

僕は冬に大勝負に挑みます。「受験」です。たった一回のテストにすべてを賭け、たくさんライバルと戦います。僕の人生を決めるこの勝負には負けたくありません。しかし、気持ちだけでは勝てません。どれだけ勉強したかが合格につながってきます。「一生懸命やる。」ではなく、「合格に本気で向き合ったから一生懸命やれた。」と考えられるようにしていきたいです。

今回考えてきた三つのことは、これから必要になってくると思っています。どんな困難にも屈せず、前に進んでいきます。

人という生き物は、より良い自然環境から成り立っている。そして、豊かな自然の中にいるからこそ、人は生きることができているのだ、と私は考えている。このように考えたのは、ある出来事がきっかけだ。

夏のある日、家族で映画を見に行っただが、その道中で車が走る道路橋の下の道のわきに、ペットボトルやアルミ缶、プラスチック製の容器など、多くのゴミが散乱しているのを車の中から見てしまったのだ。あんなにゴミが集まり、ゴミ箱でもない場所に捨ててあるのを見たのはかなり久しぶりだった。

私は小学生のときに、学校全体で地域のゴミを拾うという活動を行っていたため、「あのゴミを集めて捨てられないかな」とつい、声を出して言ってしまった。もしかしたら捨てられると思っていたからかもしれない。

しかし、「確かに汚いけれど、車の通っている道のわきなんて、危ないから無理よ。怪我をしたらどうするの。」と母に言われ、ゴミを放置せざるを得なかった私は、少し残念で悲しくなった。

あの出来事を振り返ると、ふと私の中で疑問が生まれた。

なぜ、あのようなゴミ捨て場がないところに、ゴミを捨てるのだろうか、と。

考えていると、もしかしたらあの場所、つまり道のわきというのはゴミを捨てるのに都合が良いのではないかという考えが出た。

あのような草がよく生えていたり、人目につかなかったりするところなら、片付けや持ち帰りが面倒なゴミを捨てても大丈夫、見つけられても誰かが捨ててくれるだろうと考える人がいてもおかしくはない。

ではどうしたら、ゴミをポイ捨てする人はいなくなるのだろうか。

私は、ポイ捨てゼロを促す看板をあちこちに取り付けられればいいと思ったが、これでは、看板にかかるお金と時間、そして場所が必要となってしまう。それから、ポイ捨ても含めたゴミ問題は日本だけではなく世界中で問題となっているので、看板で解決は効果的ではないと言える。他の方法はないかと考えてみたが、まだよく世界中のことを知らない私には何も思いつかなかった。

でも、それはそうかもしれない。なぜなら結局のところ、一人ひとりがゴミをどこにどのように捨てるのか意識をしていかなければ、ポイ捨てされたゴミやポイ捨てをする人たちをなくすことはできない。

では、ここで突然「外出をしたとき、片付けが面倒な数のあるゴミは持ち帰るか、近くのゴミ捨て場に捨てるという意識はこれまでしてきましたか。」と聞かれて、すぐに返事を返せない人、言いよどむ人はゴミの捨て方を意識しておらず、もしかしたらポイ捨てをしまっているかもしれない。

もし、ゴミなんかその辺に捨てておけばいいだろうとか、私はゴミはちゃんと捨てているのだから、ポイ捨てされたゴミなんてどうでもいいとか思っている人がいるなら、ゴミのポイ捨ても、ゴミ問題もなくならず、地球がゴミ箱のようになってしまう。ゴミがあふれているところに誰が住みたいと思うのだろうか。

しかし、自然が豊かで環境が良ければ人も人以外の生き物も、のびのび暮らしていける。自然環境の良さは、私たち生き物にとってなくてはならないものなのだ。

そのために、地球という大きな自然の中に生きている、私達一人ひとりが自然環境に支えられていることを意識し、ゴミ問題を少しずつ解決していく。それが、世界中に笑顔が生まれる明るい未来をつくるために大切であり、していかなければならないことではないだろうか。

皆さんは、「自分の感情をコントロールできていますか。」そう尋ねると、ほとんどの人が「できている。」と答えるでしょう。しかし、「百パーセントコントロールできていますか。」と、再度尋ねたら答えに悩む人が多いと思います。

私は、人が生活するうえで、感情をコントロールすることが大切かつ重要だと考えています。感情は人間だけが持つものです。感情が面に出やすい人もいれば、なかなか出ない人もいて、それぞれの個性だと思います。感情は豊かなのはすばらしいと思いますが、ある程度自分で抑える必要があるのではないかと感じています。

それは、学校生活の中で、同学年の人が感情に任せて心無い発言をすることがあり、私を含めて周りの人も嫌な思いをすることがきっかけでこう考えるようになりました。

また、最近のニュースを見て、殺人事件が多いように感じるにつれ、自分の考えに対する思いが一層強くなっています。

特に印象深いニュースは、神奈川県川崎市の殺傷事件です。この事件は犯人が 20 人もの人を刺し、そのうちの 2 名が死亡、18 名が負傷しました。犯行の直後、犯人は自分で首を刺し、搬送先の病院で死亡が確認されました。

この犯人が起こした事件は許しがたいものです。発表された犯行経緯を聞くと不遇な境遇から、思うような進路に進めなかったそうで、今回の被害に遭った児童の中に犯人が行きたかった私立小学校の児童がいたことが引き金になったということでした。私は犯人の境遇に同情しましたが、だからといって妬みの感情を、全く関係ない人を傷つけ、さらには命をうばったりという行動に結びつけたことは少しも理解できません。

こんな事件を起こさないようにするには、犯人はどのようにすればよかったですでしょうか。私は一度冷静になればよかったですのではないかと思います。客観的に物事を考えることで、自分のこれからしようとしている行動が正しいことなのか、そうでないことなのか判断できると思います。この事件の犯人もそうしていたならば、事件を起こさずに済んだのではないのでしょうか。

感情をコントロールする方法には、先に述べたように、まず「冷静になること」が挙げられます。さらに調べてみると、他に「他責的な考え」を改め、「柔らかい考え」を持つこととありました。

「他責的な考え」とは物事のよくない結果の責任を自分以外の人や物のせいにして決して自分ではないとする考え方です。こういう考えを強く持っている、物事の結果が自分の思い描いた結果でない場合、受け止められず、感情のコントロールができなくなるということでした。

また、「柔らかい考え」とは物事に対する結果を自己責任とし、柔軟で前向きな考えを指すそうです。

私はこの考えに深く共感します。

前に述べたように私や周りの人が経験した感情に任せた発言や行動は、他者を深く傷つけます。しかし、感情をコントロールすれば傷つく人が減るでしょう。きっと、生活しやすい環境になるに違いありません。

社会に出たら、今よりも感情をコントロールしなければならない場面が増えることが予想されます。私自身、上手にコントロールできているとは言えません。まだまだ、いろいろなことが経験不足です。感情をコントロールすることがうまくいかないこともあるでしょう。でも、そのときはまず冷静になって柔らかい考えで対処していかれたらと思います。

そして、経験不足を解消すべくさまざまなことに挑戦し、感情をコントロールする達人になりたいと思います。

みなさんはスマートフォンを使ったことがありますか。

スマートフォンは、連絡を取ったり、知りたい情報をすぐに得ることができたり、とても便利なもので、今では生活の一部となっている人も多いと思います。しかし、私たちはあまりに便利であるがゆえに、使っているうちにスマートフォンのもたらす影響や恐ろしさを考えることができなくなっているのではないのでしょうか。

まず、人との会話もメールのやり取りも言葉を使うという点は変わりません。しかし、メールでのやり取りは様々なトラブルにつながりやすいです。メールでやり取りするとき生じる一番の問題は、文章を送った人と受け取った人とで文章のとらえ方が変わってしまうことだと思います。私も友達とのメールで困惑したことがあります。友人と何人かで遊ぶ約束をし、私の家に集まることになっていました。その日、別の友人も「私も行っていい？」と聞いてきて、私は「家、集合なんだけど、なんでくるん？」という返答をしました。私はどんな交通手段で遊びに来るのかを聞いたつもりでしたが、相手にはどうして遊びにくるんだよという意味に捉えられてしまったのです。私は相手の子が私のメールを理由に傷ついていることを周りの友達が教えてくれたことで、仲直りすることができました。この経験から、壊れた関係を戻すことができない場合のほうが多いのではないかと思います。そもそも、言葉とは相手に思いを伝えるためにあり、言葉の意味を理解しようとするとき、私たちは自然と相手の口調や表情を気にしています。相手の口調や表情を気にすることで相手の言葉の意味をより正確に理解することができます。しかし、それらは会話の中でしか使うことができません。だから、メールのやり取りは人と人との間で誤解が生まれ、トラブルの原因になりやすいのだと思います。どうすればこの問題を防ぐことができるのか、私は考えました。それは自分の送ろうとする文章に、誤字、脱字はないかや、省略しすぎていないか、伝えたいことが伝わりそうかななどをよく確認することです。このほんの少しの心がけが、機械化が進む現在で一番必要なことだと思います。

メールなどが流行する今、私たちが抱える問題はもう一つあります。それは、私たちがもともと持っている豊かな感情が失われていくことです。

私はこの問題は日常生活に顕著に表れているのではないかと思います。例えば、人を傷つける言葉を平気で使ったり、優しさや思いやりの気持ちが薄れ、冷たい態度をとったり、自己中心的になってしまうなどです。私たちは誰ともかかわることなく生きていくことはできません。誰かとかかわり繋がり、支えあって生きているのです。そんな日常生活で、機械化によって便利になったことによりもたらされる影響は深刻だと思います。便利であるがゆえに、小さな心遣いを忘れてしまい、人間らしさを失ってしまうのではないのでしょうか。いずれは人間ではなく、たくさんの所でロボットが成り代わる時代が来ます。そんな今だからこそ、人との関わりを大切にし、人としての接し方を考えることが大事だと思います。

ただ、スマートフォンは私たちの暮らしにあると便利なもので、使わないほうが良いというわけではありません。今では、インターネットを通じてたくさんの人とつながることができたり、知りたい情報が簡単に入手できる時代です。私たちにできることは、便利なものを活用しながらも、人間らしさを失わないように気を付けることだと思います。どんな時に機械が必要で、どんな時に人間の感情が有効に働くのかを判断することが大切です。これからの時代を生き抜いていくために、人間らしさとは何かを今一度考えなければいけないのではないのでしょうか。

先日、私は1年間大切に大切に伸ばしてきた髪の毛を18センチ切りました。その訳と私の体験について、今日はみなさんに話を聞いていただきたいと思います。その前に、これを見てください。これは、私の家に、もうずっと前からある「命のあさがお」の種です。この種は、平成5年にこうすけ君という男の子が小学校に入学したときに、学校で育てたあさがおの種です。こうすけ君は白血病でした。彼は入院し、骨髄移植を待っていましたが、受けられないまま、その年の9月に亡くなってしまいました。たった3か月の小学校生活。彼の母まみこさんは、彼の育てたあさがおの種を「命」として繋げていくことを決意しました。こうして「命のあさがお」の種はこうすけ君の故郷新潟県から全国に広がり、25年たった私の家にやってきたのです。

こうすけ君はなぜ骨髄移植を受けられなかったのでしょうか。骨髄移植を行うには、白血球の型であるHLA型が患者さんと一致するドナーを探さなければなりません。驚くことにHLA型が一致する確率は、兄弟姉妹でも4人に1人。それ以外では数百人から数万人に1人と、非常に稀なのです。骨髄移植の登録患者で骨髄移植を受けられるのは、全体の3分の1に留まってしまうのです。

そんな現実を知ったとき、私はじっとしていることができなくなりました。何かせずにはいられない気持ちになったのです。真っ先に思い浮かんだのはドナー登録でしたが、私の年齢ではまだできません。そんな時、「ヘアドネーション」というものに出会いました。ヘアドネーションとは、白血病などの治療で髪の毛を失った子供たちに、人毛の医療用ウィッグとなる髪の毛を寄付する活動です。これなら私にも！そう思いましたが、1年前の私の髪の毛は、寄付できる長さの15センチに達していませんでした。そのため、私の挑戦は1年がかりのものとなりました。また、髪が傷んでしまえば医療用ウィッグに加工することができなくなるため、1年間は、暑い日もドライヤーで髪を乾かしたり、食べる物にも気を使ったりと大変なことも多くありました。しかし、病に苦しむ子供たちを思えばそんなことでへこたれる訳にはいきません。それが私にできる精一杯の挑戦だったのです。

そして、遂に今年、自分の髪の毛を寄付することができたのです。美容師さんにハサミを入れてもらう瞬間、この髪がどこかで誰かの役に立つ、という嬉しさに、ほんの少し自分に自信がわいてきたような気がしました。

でも、そこでまた耳を疑うような話を聞いてしまいました。この活動を、お客さんを増やすための「偽善」と言う人がいるということです。私は怒りよりも悲しい気持ちになりました。誰かの命を輝かせるために、何かできることを考えて活動していることをなぜ「偽善」なんて言うのでしょうか。

私はいつも思うことがあります。命とは大切でかけがえのないものということを知らない人はいません。でも、周囲に目を向ければ白血病だけでなく病に命をおびやかされている人がいます。いじめや人間関係、人に言えぬ悩みで自らの命を絶ってしまう人もいます。最近では親からの虐待で幼い命を奪われてしまう話さえテレビのニュースで流れています。人は、自分自身が本当に苦しい時、辛い時に初めて命の重みや生きていることを真剣に見つめるものです。命は誰にでも平等に与えられているはずです。毎日元気に登校して友達と楽しく過ごしている私たちは、つい当たり前の幸福の中で大切なことを忘れがちになってはいませんか。そんな私たちだからこそ何かしなくてはならないのではないのでしょうか。ヘアドネーションは一つの例にすぎません。小さなことでも目を見開いて真剣に考えてあなたにできることを一つ、実行してみませんか。こうすけ君、あさがおの花が咲いたよ。私に貴重な体験をありがとう。この先も命のあさがおを育て続けていきます。

今、あなたの目の前で、障害のある方が困っていたらどうしますか。

それは、友人と行った祭りの帰りの、電車でのことでした。私たちのように帰る人や、これから祭りに行くという人もいるのか、電車は混んでいました。何気なく乗っていると、近くの席の方から若い男性の怒っているような声が聞こえました。反射的にそちらを見ると、若い男性の横には障害のある方が座っています。はっきりとは聞き取れませんでした。とにかくひどい言葉を投げつけていました。周囲にはたくさんの方がいましたが、誰一人言葉を発する人はいませんでした。そのうち、その方は席を立ってしまいました。足が不自由な様子で杖をついていました。若い男性はその方に目もくれず、舌打ちをわざと大きな音でしたり、咳ばらいをしていたりしました。電車が次の駅に到着すると、その男性は周りの人たちまで押しのけて、ホームに降りていきました。すると、この出来事を近くで見ていた女性が、席を立っていた障害のある方に優しい言葉をかけていましたが、よほど怖かったのか、怯えた表情で逃げるように電車を後にしました。

私はその後、ずっと、電車の中でどうして声をあげられなかったのかを考えていました。もしかしたら、心のどこかで誰かが注意してくれるという気持ちがあったのかもしれない。目の前の出来事から、目をそらしていたのです。あの時勇気を出していれば、あんなに怯えた表情をしなかったかもしれないと今も後悔の気持ちでいっぱいです。

私が以前、福祉施設でのボランティア活動に参加したとき、そこにいらした方からこのように伺ったことがあります。「障害ってのはいいもんじゃない。健常者にとっての当たり前が私たちには当たり前とは言えない。一つひとつ時間がかかり、一人でできないこともあるけど、分かってほしい。私たちも自分の体から逃げずに向き合っているから。皆さんも私たちから逃げないでほしい。」この言葉は、私の心に強く響きました。

電車の中でのことを思い出すと、今も胸が痛くなります。あの方の不安な様子を、私は一生忘れることはできません。

今この世の中で、障害という言葉や状況に対して正しく理解していない人がいるのは事実です。私にとっても初めての難問を解くようで、「向き合って」と言われても、すぐに理解してできることではないと思っています。しかし、障害者だから健常者の仲間に入れてもらえない、比べられて差別されたりいやなことをされたりするのは、絶対にあってはなりません。障害者も健常者も、この地球上に暮らす人間です。長所や短所があって当然です。何も比較することはありません。

私は、自分一人の力でできることは少ないと思っています。確かに自分自身の力でできることも少なからずありますが、自分以外の人の力を加えることで、できることが増えることがあります。それは、健常者にも障害者にもいえることではないでしょうか。だからこそ、自分ができないと思っていることはもちろん、自分ができていること、ほかの人と協力するようにします。相手とも自分自身とも「向き合って」考えながら、良いものはより良く、足りないものはお互いに補い合う、そのような行動力が、すべての人の間にあってほしいと思っています。

ボランティアに参加する等、自分に合った向き合い方を見つけ、一刻も早く一人でも多くの方が障害を含めて、一人一人の長所や短所を理解し、共に笑顔で暮らせる世の中になることを願います。

命の重み

東京成徳大学深谷中学校 2年 早川 梨乙

私は、大切な人が亡くなってしまったことがあります。悲しくて悲しくて仕方がありませんでした。涙も止まらずに流れ続けていました。群青色の空はいつもなら綺麗に感じるのに、しばらくは何故か憎く感じてしまっていました。もしかしたら、また生き返るかもしれないと叶わぬことを願っていました。そのことがあってから『命』をより大切に思うようになりました。

ここ数年のニュースで中学生の男の子が残虐に殺された事件や無差別殺傷事件など殺人事件を多く見るようになりました。遺族の方が涙ながらに「また、あの笑顔が見たい。」「犯人の罪を重くしてくれ。」と語っているのを見て涙が出ました。亡くなってしまった方への遺族の想いが中学生の私なりに分かったからでした。自分の大切な人が突然いなくなってしまうという虚無感、悲しみだけでなく、その遺族の方には犯人への怒りと悔しさがあったのでした。私はそのニュースを見て、犯人への怒りがあふれました。自分の身勝手な行動で一人の命を奪った犯人を許せませんでした。その命は、その人がこれからも家族や友人など様々な人と幸せを感じる為にあり、その人のことを大切に想っている家族の命でもありました。命は自分自身だけのものではなく、命をかけて生んでくれた母親や一生懸命に育ててくれた父親、大切に想ってくれている人達からも必要とされている大切な『命』だからです。その尊い命を、人の人生を、一瞬にして奪った犯人がいつか後悔しても、もう取り返しがつかないのです。どんなに強く願っても、亡くなってしまった人は帰ってはこられないのです。笑顔を見ることもできなければ、話すこともできないのです。それが遺族をどんなに辛く、悲しく、苦しめるのかも被害者の命が尊く重みがあるものかも犯人は考えずに、自分のことだけを考えて人の命を軽率に奪うのです。

また、その軽率な考えや行動が人の命を奪う事故にもつながります。池袋暴走死亡事故でも人のことを考えずに自分だけのことを考え人の命を一瞬にして奪い、人のこれからの人生もその人を大切に想う人のこれから先の被害者との思い出も奪ったのです。

このようなことがこれから先、二度と起こらないように日本中の人に、いや、世界中の人に『命の重み』を今一度知り、よく考えてほしいと思います。そして今、自分が生きているということを、自分が生まれてこられたということに感謝をして毎日を大切に生きていってほしいと思います。

遺族は決して悲しみが晴れることはありません。しかし、前に進んでいかななくてはならないのです。亡くなってしまった大切な人の分まで生きようと必死に毎日を過ごすのです。尊く重みのある『命』を決して誰も奪ってはなりません。その命はその人の命だけではないのです。私は大切な人が亡くなってしまったことが頭に浮かぶと今でも涙があふれます。しかし、私は力強くその人の分まで生きていきます。いつまでも後ろをばかり見ていたらその人に申し訳ないですし、恥ずかしいのです。きっと、その人は「強く生きて。」という人だからです。

私の学校では、2年生の冬に「志高式」という行事があります。それは、自分の夢をクラス内で1分ほど語り、その中の数名がさらに1、2年生の前で発表するという行事です。

私は、この志高式で特に気になったことがあります。中学2年生というのは、自分の向き、不向きを理解して現実を見始める頃であり、当たり前と言えば当たり前なのかもしれませんが、将来公務員などに就きたいという人が、かなり多いということです。

その中で、親に推薦されたという人もいることに、少し驚きました。確かに「将来の夢」というと、親や友達などに相談します。それだけで、人生が180度変わってしまうのだから、それに関しては、同意見です。しかし、子どもがやりたいことをやれば良いという考えではなく、安定しているからなどという理由で公務員を勧めることについては疑問を感じます。

親の視点から見て、親孝行もしてほしい、安全で安心の未来を送ってほしいというのも、中学生ながら、親から感じ取れます。さらに、親でも子でも挫折はできる限りしたくないし、してほしくはありません。しかし、一度も挫折を知らないと、「今のままで良いんだ。」という現状維持を求め、向上心や死に物狂いで頑張るようなことが全くできなくなってしまいます。自分自身がそうだったため、少なからずこのような人はいると思います。そのため、職場のベテランの人に「若い人はこれだから。」と言われて仕事が嫌になったり、すぐに「パワハラだ。」なんて言葉が出てしまう状況になってしまうのではないのでしょうか。

さらに、最近はその少いことでパワハラがなんだと騒がれるような時代になりました。確かに、労働者が働きやすい環境を、会社側でも、一社員からでも作っていくことは、もちろん大切です。しかし、ほんの少し気分を害したからや、嫌な気持ちになったからと言って労働環境が悪いという訳ではないと思います。

自分たちや中学生の中でも、いじめをなくすというのは永遠の目標になると思います。いじめは絶対にあってはならないですが、その中で強く生きて行こう、頑張ろうとしている人がいるのも事実です。その中で、大人である会社員などの労働者が、少いことで声をあげたら、子どもたちはどう思うでしょう。私は「こんなことでも、辛いとか言っているんだ。」と行ってしまったことがあります。しかし、学校生活で少いふざけが嫌で、声をあげて助けや救いを求めるのは、悪いことではないと思います。実際、神社やお寺に行き、頼みごとをしている姿を見るからです。でもそういうのが当たり前の世の中になってしまうと、自分の意見もろくに言えない、個性も出せない、お互いが遠慮し合って生きるような世の中になり、その先には悪いことを悪いと言えない、革新的なこともできない、つまらない世界になると思います。私は、そんな環境は嫌です。

そんな世界にならないためにも、大人が子どもたちに言葉で伝承すべきこともあれば、姿を見て学ぶようなこともあると思います。今、その区別がつかない人もいるかもしれませんが、個性を見い出せる世界こそ、これから必要不可欠になると私は考えます。

だから私は、自分の意見を持ち、それを発信でき、だからといって自分のことだけしか考えないような自己中心的な大人にはならないようにしたいです。

日本では、来年の2020年に東京オリンピックが開催されます。世界中のたくさんの選手が日本に集まるので、私はとても楽しみです。そこで、私はオリンピックに関する人権問題についてインターネットで調べてみました。

すると、「オリンピックの歴史の中で最も有名な写真」と取り上げられていた1枚の写真を見つけました。それは、1968年のメキシコシティ大会の陸上男子200メートルの表彰式の写真でした。二人の米国代表の黒人選手が、黒い手袋をはめた拳を高くつきあげていました。これは、黒人差別への抗議のパフォーマンス「ブラックパワー・サリーウト」と呼ばれるものでした。その直後、会場の観客からはブーイングが巻き起こりました。彼らのパフォーマンスは「非政治的で国際的な場としてのオリンピック」という前提に反すると考えられ、彼らはその後、オリンピックから追放されてしまいました。

これが、たった50年前に起こった出来事なのです。私は、人種差別なんて昔の話だと思っていました。オリンピックでこんな出来事があったことも、今まで知りませんでした。彼らの行動は、とても勇気があるものだったと思います。選手生命を犠牲にしてまで、自分たちの苦しみを世界に訴えたのです。彼らは帰国後もアメリカ国内から非難・中傷されましたが、彼らは黒人の権利獲得への運動を続けました。私は彼らの、周りの反応に動じず、自分たちの考えを貫く心に感動しました。いつも友達の言葉ばかりを気にして、自分の考えすら持たないことを恥ずかしく思いました。人種差別に対してもそうです。今まで人種差別に対して、自分で何か考えたことなどありませんでした。自分には関係ないと、決めつけていました。だから、メキシコシティオリンピックのあの写真を見たときは、衝撃を受けました。ほんの少し前には、人種差別の考えが色濃く残っていたことを知り、自分でも人種差別について考えました。

人種差別の問題は、「わかりあおう」なんて一言で解決できる問題ではないと思いました。今では、世の中も人種差別に厳しくなり、「アパルトヘイト」という言葉もニュースでよく聞くようになりました。黒人の人々を連想させるようなデザインの服や靴などが製造中止になったというニュースも、最近をよく見かけます。数十年前に比べて、世の中は**大分**変わったなと思います。ですが、それだけではいけないような気がします。デザインだけの問題ではないと思います。本当に世界中の人々が、みんな平等になるには、まだまだ時間がかかると思います。その間に自分ができることは、差別の問題に対してたくさん考えることだと私は思いました。まずは、知識をつけていこうと思います。多くの知識を身に**付**けて、いつか自分の考えが持てるようになりたいです。

今回、オリンピックの人権問題について調べてみて、人種差別のことを考えることができました。そして、同時に来年のオリンピックへの期待が、また高まりました。次のオリンピックは競技だけではなく、選手の思いにも注目してみたいです。

自分らしさって何だろう。私はふと、考えることがあります。

自分や相手の個性について考えること。それは時に自分を見つめなおす、いい機会になります。

ですが、ふと個性について考えることはあっても、『自分らしさ』とは何かを真剣に考えたことはあまり多くはありません。そのため、学校で行なわれるアンケートやテストの質問紙調査で、少しばかり苦勞することがあります。特に困るのは、よく聞かれる『あなたには良いところがありますか。』という項目。私は、自分の良いところも悪いところも個性として捉えるため、答えるのに苦勞するのです。

私は、今回中学生の主張を書くにあたり、『自分らしさ』や『個性』をテーマにしようと考え、自分の思いを綴りました。その時私は気付きました。自分の頭で考え、言葉にする。その行為を通じて書かれた言葉は『自分らしさ』を帯びているのではないかと。『自分らしさ』とは、難しいものではなく、自然に溢れ出ているものなのではないかと。

私も、クラスの仲間も、そしてこの場にいる各校の代表者の皆さんも、『自分らしさ』とはそもそも何なのかということに気づいていない人が多くいるのではないのでしょうか。

本を読んで知ったこと、また人から聞いたことを、そのまま自分の中に吸収してしまうこと。これこそが、『自分らしさ』に気づけない原因なのではないかと私は思います。本を読んで、話を聞いてそこで終わりにするのではなく、一度立ち止まって、考えることが必要なのです。外から得た情報を、自分の体験や考え方と照らし合わせてみる。意味が理解できなければ、噛み砕いてわかりやすくする。そのようにして、自分のものとして吸収した情報を書いてみたり、人に話して伝えてみたりする。そうすることで、初めて知り得た情報が、自分の財産となり、『自分らしさ』として表れてくるのではないのでしょうか。表れたものが、人と似ていても、また、全く異なってもいいのです。

自分らしさとは、自分自身で考え、それを表現することで初めて『私』という人間からにじみ出てくるものだと思うのです。インターネットを用いれば、世界各国の様々な人たちの考えを知ることができる時代を生きる私たちだからこそ、このプロセスはとても大事なことだと私は思います。

『自分らしさ』。それは、気付いているようで実は気付きにくいものです。だから私たちは『自分らしさ』とは何か、自分の『アイデンティティ』とは何かと考え、思い悩むのだと思います。『自分らしさ』を見つけるコツ。それは、やはり『考える』ことだと私は思います。情報を噛んで噛んで噛み砕いた結果、出てくるのは、自分だけの、自分にしか表現できない『自分らしさ』そのものなのではないのでしょうか。

『自分らしさ』を理解し、より深めるために必要なこと。『自分自身で考える』というプロセスを大切にし、私は生活していきます。

ここに誓います。今後『自分らしさ』を積み上げ、私という人間を大きく成長させることを。

ありとあらゆるものが捨てられているゴミの山。その光景が、動き始めました。ゴミに同化しているような汚れた粗末な服。そこからのぞく骨がくっきりとわかる手足の少女がゴミ山から使えそうなものを探し、集めているのです。私は耳の奥でぼーっと汽笛がこだまするような感覚に襲われました。朝早くから日が暮れるまで同じ動きをひたすら繰り返す少女に唾然としました。声を出すことも、息をすることさえ忘れてしまっていたかと思うような時間を過ごしました。しかし、これはある国の現実の風景なのです。風景というには、あまりに切ないものでした。その少女は、集めたゴミをお金に換えているのです。家族のために私よりも小さな少女が働いていることの現実を見て、心が痛くなりました。私が『児童労働』という言葉は初めて意識した瞬間でした。

『児童労働』とは、義務教育を妨げる労働や法律で禁止されている18歳未満の危険・有害な労働のことを指しています。世界には1億5200万人、つまり子どもの10人に1人が、『児童労働』をしているといわれています。開発途上国では子どもの約13%が、後発開発途上国では約25%、つまり4人に1人が『児童労働』に従事しているそうです。日本の現状に比べると、この大きな数字に驚きを覚えます。私の身の回りを見ても幼い子どもや中学生が学校に通わずに働いている姿を目にすることはありません。

なぜ、子どもたちが働いているのでしょうか。その理由は「貧しいから」だけではないようです。「学校へ行っても意味がない」とか「女の子は教育をうけなくてもよい」といった意識や考え方が『児童労働』を生み出す一因になっているようです。私は、今までこのようなことを考えたこともありませんでした。この一つの光景から『児童労働』と自分の無知に対する憤りを覚えるとともに、自分自身の置かれた環境を見つめ直すことができました。

私の学校では、『夢・志の実現』のための活動を行っています。一人一人が自分の将来に思いを馳せ、それに向かって自分のできることを目標として設定し、決意表明をします。しかし私は、将来の夢をすぐに答えることができませんでした。中には既に夢をもっている人もいますが、「そんなこと言われたって、決められるわけないじゃん。」と本音を漏らす友達もいました。

ゴミの山から使えるものを必死に見つけていたあの少女が将来への夢を聞かれたら、なんて答えるのでしょうか。私は日本に生まれ、両親をはじめとした大人に支えられ、何不自由なく生活してきました。幼稚園・小学校・中学校に当たり前のように通ってきました。さらに高校・大学への進学も当然のように考えています。学校生活に必要なものも稽古事も親にお願いすれば叶えられ、趣味に時間やお金を費やすことも許されています。そんな生活に何の疑問も抱かずに生きてきたこの14年間。自分が恵まれた環境に生きていることやそれを活かす責任をもっともっと自覚しなければいけないのだとようやく気づくことができました。

毎日学校で授業を受けること、勉強すること。「だるい」「面倒くさい」と平気で不平不満を言っている現実をあの少女に聞かせることは恥ずかしくてできません。今の私には『児童労働』を強いられ、学校も学ぶことも知らずにいる子どもたちの数を減らすことはできません。しかし恵まれた環境だからこそ描ける夢、果たせる責任はあります。これからの日本や世界を担う私たちがやるべきことは、恵まれた環境に感謝しながら、大いに学び蓄えたものを世界中の人のために活用していくことです。こうした現実を知った今、『人の役に立つこと』これが私の志となりました。私が受けた教育で、「教育」が人を変え、世界を変える大きな力になることを証明していきたい。あの少女のために。